

風張からは川へ

—新井田川下流域における縄文時代後・晩期の遺跡動態—

小林圭一

八戸市内の新井田川下流域の段丘上には縄文時代の遺跡が多数分布しており、有力な地域圏が形成されていた。中でも風張(1)遺跡は国宝「合掌土偶」を出土した遺跡として、また東北地方の縄文時代後期では極めて稀な環状集落として著名である。この集落は後期中葉十腰内3式期に成立し、後期末葉十腰内5式新段階に廃絶されたが、その後継の集団は新井田川対岸の是川中居遺跡に移住したと考えられている。是川中居遺跡は晩期全般を通じた拠点集落で、特に豊富に出土した土器や土偶、漆工芸品等から、亀ヶ岡文化を象徴する遺跡として古くより衆目を集め、遺跡は国の史跡、出土品は国の重要文化財に指定され、縄文時代を代表する遺跡と評価されている。同遺跡は近年史跡整備の一環として発掘調査が実施され、墓域を主体にして水辺に展開した集落の内容が明確にされている。

風張(1)遺跡は共同墓地を中心に同心円状に住居が配置された環状集落で、十腰内3式→同4式古段階→同4式新段階→同5式古段階→5式新段階までの、5型式にわたる集落の変遷が跡付けられる。十腰内3式～4式新段階にかけて前半期は集落の住居が南側に集中していたが、十腰内5式古段階～同新段階の後半期は共同墓地を均一に取り囲む分散した傾向が見て取れる。集落の開始に当たっては、当初より墓域を中心にレイアウトされ、墓域付近が平坦に造成されたと推定され、東西に二分割された共同墓地から、先祖祭祀を中核とした分節化した社会の存した可能性を窺わせる。環状集落は一般には縄文時代中期に盛行し、後期では分散型集落に転換し影を潜めたが、東北北部（青森県・秋田県北半・岩手県北半）では大規模な環状列石に象徴されるように、複数集団による共同墓地やモニュメントの造営が顕著となっている。風張(1)遺跡の集落形成が忽然として始まることから、他所から移住してきた集団が創設に関与しており、周囲に分散していた複数集団が統合することで成立に至ったと推定される。墓域の分節化は異なる出自の構成員を反映しており、集落の創設に関与した候補の一つに、2.5 km離れた馬淵川水系の丹後谷地(1)遺跡(八戸市)を上げることができる。

風張(1)遺跡は十腰内5式新段階に廃絶され、800m離れた是川中居遺跡に集落が移ったとみられるが、該期の東北北部では遺跡数の減少傾向が指摘され、風張(1)遺跡の集落の廃

絶が広域的な潮流に取り込まれていた可能性も考えられる。是川中居遺跡では既に十腰内4式新段階に小規模な集落が成立し、風張(1)遺跡と並存の関係にあったが、風張(1)遺跡の廃絶に伴って、同遺跡の構成員またはその一部が十腰内5式新段階に移住してきたことで、新たな拠点集落が出現したことになる。是川中居遺跡には集落の環状構造は引き継がれなかった。しかし墓域と居住域を併せ持つ構造となっており、場所を移しても先祖祭祀や葬祭儀礼が、集団の紐帯を深める上で重要な役割を果たしていたと考えられ、集落は弥生時代前期砂沢式期まで脈々と営まれた。また漆工作業を日常的に行った漆器生産地として名声を博し、集積された技術の習得や情報入手のため他集団の頻繁な往来があったと想定されている。

風張(1)遺跡では住居跡の床面やその直上の堆積土から完形土器が多数出土したが、祭祀や儀礼と結び付いた意図的な廃棄行為、それに住居の廃絶に伴う儀礼を反映したものと指摘される。従って同遺跡の住居の夥しい重複と完形土器の出土量は、住居の廃絶と改築・構築が頻繁に繰り返され、それに伴う儀礼等が盛んに執り行われた状況を暗示したもので、住居内から出土した著名な「頬杖土偶」(十腰内3式)や「合掌土偶」(十腰内4式古段階)も、最終的には廃屋儀礼に関連していたと考えられる。このような祭祀的色彩の濃い集落の性状は、後続する是川中居遺跡にも継承され、呪術・祭祀の興隆を特徴とした亀ヶ岡文化に繋がったと考えられ、亀ヶ岡文化の形成母体として風張(1)遺跡が果たした役割は、極めて大きかったと理解される。

上記したように風張(1)遺跡と是川中居遺跡は、同じ出自の集団によって営まれた一体の遺跡であり、縄文時代後期後半～弥生時代前期までの1,000年以上にわたって中核的な集落が維持されていた。このような長期間の営みを可能にしたのは、当該域が豊富な資源に恵まれていただけではなく、遺跡間交流の要衝になっていたからと考えられ、新井田川に面し且つ海岸部にも数km(現河口から7～8km)と近接した地の利が、大きく関連していたのであろう。また共同墓地を中心とした先祖祭祀や葬祭儀礼・廃屋儀礼の盛行は、集団の協調や編成に重要な機能を果たしており、亀ヶ岡社会の根幹を成していたと考えられる。